
氷の花

ネコミワコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の花

【コード】

N0507A

【作者名】

ネコミワコ

【あらすじ】

不幸な運命を背負って生まれてきた由莉香とカメラマンをめざす
純粋な少年、悠の物語。

はじまり(前書き)

勉強不足ですべてにおいて設定がめちゃくちゃでとても申し訳ないです。一人一人のキャラクターには強い思い入れがあります。

はじまり

僕はそれまで女の子とすれちがって思わず振り返ったりとか、そのしぐさや表情が目には焼きついてはなれなかつたりとか、そんな経験をしたことがなかった。女の子っていうのはみんな優しく、清潔で、愛されるべき天使のようにいつも笑顔をふりまいていてとても安全な存在で、ある程度人に愛されて幸せに生きてきた僕にとっては何の違和感も与えない同種の生き物だった。

オイ、ユウ、フィルムダシテクレ、
だから初めてだった。一人の女性をこんなにみつめたのは初めてだった。

その人は濃い紫のワンピースを着ていた。
艶のある黒髪が透き通るように白い肌の輪郭にそって背中あたりまで流れていた。

瞳は雨に濡れた森みたいに深い緑色で、その視線は静かに強く僕を押さえつけた。

オイ、ユウ……

「悠！」

宮元さんの声にびくつとして現実に引き戻される。

「あつハイ！すみません。……えつと」

僕はとつさに肩にかけていた大きな麻のカバンの中を探したが、求められたものがわからず宮元さんのほうをちらつとみた。宮元さんは大きなカメラの背部をあげ巻ききったフィルムを僕のほうに差し出しながら大きいため息をついて言った。

「新しいフィルム。」

僕は急いでカバンからフィルムケースを探して新しいフィルムを取り出し、宮元さんの手のひらの上のそれと交換した。とり終えられたフィルムを大切にケースにしまい、さらにそれをしまうための袋を探した。

「頼むよー。この仕事大事な仕事なんだからさー。失敗したら今回だけじゃなくて今入ってる仕事もやばくなっちゃうよ。」

言いながら新しいフィルムをカメラにセットして背部のふたをしつかりと固定すると僕の方をみてニヤツとする。

「まああんなにいい女が目の前にいたんじゃぼけっとしててもしょうがないか。」

見られてた。と思うとかーとして耳の端まで熱くなっていくのがわかった。

女の人にみとれたのも初めてだったけど、人に凶星をつかれてものすごく恥ずかしくなったのも初めてだった。頭の中は動転してるし、胸のあたりはざわざわする。

「そんなんじゃ・・・。」

精一杯いえたのはそれだけだった。

「かわいいねえ悠君は・・・。」

宮元さんは小刻みに肩をゆらして笑い続ける。
からかわないでください。

僕の口からその言葉が飛び出す寸前に宮元さんはレンズと向き合った。僕はのどの先まででかかっていた言葉をぐつと飲み込んだ。レンズを通してその先を覗く宮元さんの周りの空気が止まり緊張が走る。誰も寄せ付けない、近づくことなんてできないオーラ。普段はふざけたオヤジで女好きでちゃらんぼらんこの人に僕がどうしようもなく懂れる理由がそこにあつた。レンズの向こう側には獲物がいるんだ。すごく強くて、美しくて、この人の目を通してじゃなきゃみえない獲物が、そしてこの人は必ずその獲物の心臓を打つ、絶対の自信を持って。カシャッとシャッターの音がすると止まっていた空気が動きだす。僕もふつと息をする。そして何度も思ったことをまた思う。かっこいいなあ。僕もいつかこんな風に写真を撮りたい。

レンズから目を離すと僕の方を見て宮元さんはまた笑った。今度はからかった笑い方じゃなくて獲物をしとめたプロの満足そうな笑み

だった。

「悠、お前のかわいい一目ぼれ記念の一枚。」

ふと目をやると宮元さんがカメラを向けていた先にはさっきの緑色の眼の人が立っていた。もう僕の方を見ていなくて隣の黒いスーツの男と話しているみたいだった。

「だからもうあの女にみとれるのはやめてくれ。仕事に集中！」

宮元さんに背中をバシッと叩かれて僕は息を詰まらせた。筋肉質の三十八歳の一撃は結構つらい。僕は苦笑いしながらこたえる。

「・・・はい。」

宮元さんは定着したファンを持つフリーの写真家で僕は高校生になった今年の春からそのアシスタントのバイトをしている。ずっと一人やそのときどきのスタッフと一緒にやってきた宮元さんは特にアシスタントを必要としていたわけじゃなかったけれど、自分に憧れて写真家をめざしている僕がアシスタントとして自分のもとの勉強することを許してくれた。まあそこにはあるコネがあったんだけど・・・。コネってというのは僕の母親と宮元さんとの関係だ。僕の母親

は14歳から僕を生んだ22歳までの8年間アイドル歌手として芸能界にいて結構爆発的に売れてたらしい。宮元さんは出身が長崎で地元の高校を出るとすぐ写真家になるために上京してフリーターをしながら写真をとって新聞社や出版社に売り込みをした。そして少しずつ仕事を頼まれるようになってその中に母のインタビューか何かの仕事があつてお互い20歳の時二人は知り合った。僕の母は陽気でポジティブな人でそして何についても才能のある人間が大好きだった。だから女好きで軽いことばっかりいつてちゃらんぼらんでもカメラを持つと誰よりも自分を綺麗に撮ることができる宮元さんのことをお気に入りカメラマンとしてことあるごとに採用させた。母が引退する直前にだした最後の写真集も宮元さんによるものだった。僕は宮元さんが撮った物でもあんまり親の写真集なんてみたくないんだけど、昔一回みたその写真達は息を飲むくらい綺麗な瞬間

の母ばかり収められていた。そして出会いから18年間、母が芸能界を引退してからも、友人の関係は続いている。

「友達っていつても会った頃は売れっ子アイドルと無名カメラマンだったしな、華絵さんは俺を一流のカメラマンまで押し上げてくれた恩人で、女を撮る才能を引き出してくれた被写体っていう特別な存在なんだよ。俺の思いは男女の関係を優るよ。お前のおやじには悪いけど彼女は俺にとって最高の女だ。」

昔、宮元さんは言った。いつだったか、何がきっかけでそんな話になったのか覚えていないけどそれは綺麗な夕焼けの日にふたりで落ちてく真っ赤な夕日をじつとみてたときだった。

僕は男女の関係なんて良く分からないし、ましてやそれを超える特別な存在ってのもあんまり理解してなかったけど、いつになくまじめな表情の宮元さんに圧倒されてなんとなく納得してうなずいた。38になってもまあその辺のおばさんと比べると格段に綺麗でいつも何かおもしろいことをみつけてはケラケラしてる母のこととか、口数は少ないけど落ち着いていて母より断然優しくて小さな企業の社長をしている父のこととか、宮元さんも交えて4人で庭でバーベキューしたときのすごく楽しかったこととかを思いだしながら、年をとると色々あるんだな。と考えていた。

そんないきさつがあつて僕は小さな頃から宮元さんを知っていて、ちよつとした遠出の撮影にも何回か連れていってもらったりした。

母より6つ年上でおちついた雰囲気のお父とは違って、根無し草みたいに漂いながらふつとした瞬間獲物を狙う猟師に変わる宮元さんは男の僕からみても魅力的でなんか恥ずかしい言い方だけどアニキみたいな存在でいつしか宮元さんを形作っているカメラにも興味をもつていった。僕がアシスタントになりたいって言い出したとき、最初は戸惑って俺は人に何かを教えられるようなカメラマンじゃないよって言っていたけど、僕の両親からその仕事ぶりについて絶対的な信頼を受けてた彼は二人のプッシュもあつて僕をアシスタントとすることを許してくれた。特別に何かを教えるわけじゃなくただ

仕事の手伝いをするだけ、学べるものがあるんならそこからかってに学べってかたちで役に立つといえないような僕に少ないながら給料も出してくれた。

僕は小学校のとき宮元さんに古いカメラをもらって、それからよく庭先の花とか、母とか父とかの写真を撮っていた。雑誌を読んだりとか、一人で電車にのって山とか湖の写真を撮りにいったりとかもしていたので、宮元さんの仕事に必要なカメラの知識は素人並ではあったけどそれなりに持っていた。

「俺の撮る写真はおまえには撮れない。でもおまえも俺に撮れない写真が撮れる様になるよ。」

宮元さんの仕事部屋に飾られてる作品に見入っている僕の頭を後ろからぐしゃぐしゃにかきまわしながら宮元さんはよく言った。僕は心のそこからカメラマン宮元祥吾を尊敬している。

「まだ本番まで一時間はあるな。舞台の感じも大体つかめたしちよつくらい一服すつかー？」

右手のごつついオメガの時計を見ながら宮元さんが動き出す。黒の長袖シャツは少し薄手で宮元さんの腕に絡みつくみたいにしてきれいな線を出していた。宮元さんは長身で細身だけど筋肉質で手足が長い、とにかくすごいスタイルがいい。まつげが長くて切れ長の眼をしている。鼻は高くて骨ばっていて、口はちよつと薄いけど癖のある感じがかつこいい。だから女好きなだけじゃなくて女によくもてる。だけど彼にとってそれは遊びとか大人の関係ってことで彼が本気で女と向き合うのはそこにレンズがあるときだけらしい。一度も結婚したことがないし、きちんとした彼女と呼べる人もいないみたいだった。

聖霊女子大学ハーブサークルが催している秋の発表会の撮影が今日の仕事だった。聖霊女子大学はそこに通う学生の大半が日本有数の資産家のお嬢さんたちばかりというちよつと近づきがたい感じの大

学で、僕はどきどきして構内を歩いた。宮元さんはいろんな仕事を
してきていて、この大学に通うお嬢さんたちの親にもファンが結構
いてパーティー写真を撮ったり、お嬢さんの写真を撮ったりしたこ
ともあるそうで、慣れた感じで伝統的で優雅な雰囲気のある絨毯の上を
平然と歩いていく。たまに昔のお客さんとすれ違うこともあった。

「あら、宮元さん。お久しぶりですわ。今日は何のお仕事ですか？
また私のバレリーナ姿を撮ってくださいね。」

「お久しぶりです。またいつでもご連絡ください。私のカメラもは
やくお嬢様の黒鳥を撮りたいっていつてますよ。」

僕はすぐ居心地の悪い感じがして宮元さんの少し後ろでぺこぺこ
と頭を下げながら歩いた。

外部スタッフのために用意された小さな教室一個分くらいのスパー
スの楽屋には6人がけのテーブルと椅子のセットが3つあり、その
ひとつには加熱器で温められた紅茶とコーヒーのガラスポットが2
つずつとそのためティーカップが十数セット、マドレーヌとクッ
キーがのった白い器が2器綺麗に並べられていた。宮元さんはふー
と息をついて椅子にすわり、テーブルの真ん中につまえた灰皿をひ
とつ自分の方にひきよせた。僕は持っていた荷物を宮元さんの向か
い側の椅子の上において聞いた。

「コーヒーでいい？砂糖いれる？」

宮元さんは紺色のパンツのポケットからSevenStarを取り
出してアンティークのzipperでくわえたタバコに火をつけてい
た。大きく息を吸うと薄い唇をとがらせて天井に向かって細い煙を
はく。そして疲れたって感じの苦笑いで僕を見る。

「コーヒーに砂糖1杯。」

宮元さんは普段はコーヒーに砂糖をいれない。でも疲れてるときは
糖分が頭の働きを助けるんだって言って一杯だけいれる。本当に効
果があるかは自分でもわからないけど、とりあえず頑張ろうと思え
るらしい。僕の母はそんな宮元さんをおかしいって笑って笑い転げ
ていた。

僕はティーカップを二つとってコーヒーを注ぎ、砂糖を一杯ずつ溶かすと宮元さんの前と僕の座るところにおいた。マドレーヌとクッキーののった白い器もひとつ自分達のテーブルの上に移動させて宮元さんの目の前に座る。

「サンキユ。」

宮元さんは軽く言つて、僕をみてわらう。

「お前顔は華絵さんそっくりだけど、気が利くところは親父似だな。」

確かに、と思つて僕も笑う。

「母さんだつたら砂糖は2杯ずつだね。あの人は自分のベストが他人にも通じるつておもっているから。」

「そついや昔、めちやめちや甘いシュークリームとか無理やり食わされたな」。本人は親切のつもりだし。」

「僕なんて小学校の低学年の時におしゃれとかいって変な帽子ばかりかぶせられて一時期クラスの笑いものだったよ。」

本当困るつていって宮元さんも僕も声に出して笑いだす。宮元さんが灰皿におしつけてタバコの火を消すと、僕はクッキーを一枚つて一口で食べた。クッキーはすぐくしつとりしてて何回か噛んでるうちに溶けてなくなつた。

「宮元さん。これうまい。」

ぱつと顔をあげた僕をみてまたクスつとしながら宮元さんもクッキーをひとつとる。でもすぐには食べずにじっくり査定するみたいに表と裏をチェックする。

「これ高いんだぞ。たかがクッキーのくせに一枚200円だ。さすがつて感じたね。」

言つてぱくつと一口で食べた。値段を聞いて3枚目に伸びていた僕の手は瞬間的に止まる。僕が家で食べた中で一番高級なのは一枚だけでもかなりポリウムのあるswanのでっかいチョコチップクッキーで確か一枚100円だった。それでも1年に数回母が買ってくるくらいでそんなにほいほい食べてるもんじゃない。大きさから

したらswanのそのの4分の1もないこのクッキーが2倍の値段なんてやっぱすごい世界だな。なんて関心している僕を尻目にうんやっぱ、うまい。とか言いながら宮元さんはぱくぱくクッキーを食べていた。

「今回の給料分ちゃんとかつとけよー。」

笑いながら僕も3枚目のクッキーをとる。そして口の中でクッキーを味わいながらあれっと思った。

「宮元さんなんでクッキーの値段なんてわかるの？」

僕の問いに反応して宮元さんは口の中に残っていたクッキーをコーヒード流しこむとちよつと落ち着いてから、ふんつと鼻で笑う。

「俺はクッキーを誰より旨そうに撮ることだってできるんだよ。」

僕がきよんとしているときも残りのコーヒードを飲み干して宮元さんはちよつと嫌そうな顔をした。

「上京してすぐの頃なんでもいいから仕事くれっていった仕事事がデパートのチラシ用の撮影だったんだよ。あの時はこのクッキー相手に1時間もシャッターきつたから色も形も表面の感じもしっかり覚えて今見たときもすぐわかった。」

まあ昔のことだって感じて最初の量から半分くらいになったクッキーの白い器に視線を落としてひとりごとみたいにつぶやく。

「でもあの時はこんなバカ高いクッキー誰が買うんだ？って思ってたけど、こうやって皿いっぱいに出してくるやつらもほんとにいたんだな。」

宮元さんはいろんな仕事してきたってきいたけどデパートのチラシ撮影の話聞いたのは初めてだった。今でこそ自分の好きな人物や動物を撮る仕事を多いけど、最初の頃はほんとにいろんな仕事をしてたんだ。そう思うとカメラマンとしての宮元さんを少し身近に感じた。

自分をじつとみつめる僕の視線に気づいて宮元さんはちよつと赤くなつた。

「なんだよー。笑いたきゃ笑えよ。怒らねーよ。」

そんな宮元さんの様子をみて僕はクスッと笑ってしまった。

「おかしかったんじゃないかって、ちよつと考えてたの。僕もいろんなものを撮りながらいつかは宮元さんみたいに自分の形ができたらいいな」。って。」

宮元さんは真顔になって右手で頬杖をつくと5秒くらい考えてから言った。

「悠。おまえってほんとに素直だな。そんなんじゃない女にだまされるぞ。」

「なんでそういう話になるわけ！意味わかんないよ！」

「まあいつか分かるよ。俺ちよつと便所いつてくる。」

むうとふくれる僕をみて宮元さんは部屋を出て行った。僕は、なんだよ。と思いながら今度はマドレーヌに手を伸ばす。一口たべるとふわーとオレンジの香りが口のなかに広がった。

まあ宮元さんが人をからかうのっていつものことだし、これくらいであんまりイライラしてちゃあの人のそばにはいけないよな！。

口のなかのおいしさで心も平和になったので僕はそう考えることにした。そしてふつとその値段がきになってマドレーヌをまじまじとみつめてしまった。

マドレーヌを食べ終わると空になったカップを使用済みカップおきばにおいて御菓子類の入った白い器をもとの場所に戻した。

そしてかばんの中から二つ折りのA4のプログラムをとりだすとテーブルの上に広げた。

演奏会は1時から6時の予定で1番から28番までの演奏者名、曲名、作曲者名が記されていた。僕は今までハープの曲を聴いたことがなくてそこにのっている曲名も全部わからないものだった。プログラムをみながらどの辺でフィルムを交換するかとか、写真は全部で何枚くらいかとか、現像するのにどのくらい時間がかかるかとかいうことを考えていると会場の方から僕のいる休憩部屋に向かってゆっくりと歩いてくる女性物の靴の音が聞こえてきた。

そしてその足音の人が部屋に入ってくる気配がして、僕が入り口の

方に目をやるとそこにはさっきの緑の眼の人が立っていた。

「あなた宮元さんと一緒にいらした方よね？彼はどちら？」

僕はビツクリして椅子から立つと彼女の方を向いて気をつけをしてしまった。

「あえつと宮元さんは・・・とうとう・・・」

トイレです。と言いそうになるのをお手洗いです。と言い直そうとして慌ててかみかみになってしまった。

「お手洗いに行きました。」

彼女は僕の慌てぶりを笑うでもなく無表情に

「あら。そう。」

といって左の手首にはめられたキラキラした時計を確認した。

「彼に伝言してただけるかしら。今日発表会の後にマリオットホテルで懇親会がありますから是非出席してください。あなたに会いたがってる子がたくさんいます。その後少しお話がありますから懇親会が終わったらバーの方にいらして下さい。」

そして次次と言われて困惑している僕をちらつと見た。

「よろしいかしら？」

「はっはい。」

彼女はふうとため息をつくと緑色の目でぐつと僕を捕らえた。静かで強い視線。会場で目が合ったときと同じで僕は石になったみたい。動けなくなった。

「少し頼りないけれどきちんと言えてくださいね。お願いよ。」

それだけ言うとさつと身をかえし部屋を出て行くとした。艶のある髪がふわつとゆれてそれまで髪の下に隠れていた薄紫色のイヤリングがキラツと光った。

僕は彼女の視線から開放されて我に帰って慌てて呼び止めた。

「あの！」

彼女はぴたつと止まってゆっくりと振り向いた。

「何かしら？」

不服そうな表情だった。

僕は胸がきゅつとなるのを感じながら小さな声でいった。

「お名前を教えてください。」

彼女は一瞬あっけにとられたような表情をした。

「あら、ごめんなさい。知っているものだと思いましたの。望月由莉華です。今日のサークルの会長です。」

アシスタントできてくるくせにそんなことも知らないの？と非難されたいだった。

「あつすみません。情報不足で……。」

「もうよろしいかしら？」

僕は胸につかえている疑問を頭の中で繰り返した。どうしよう。どうしよう。でもこの人は迷っていたらすぐに部屋から出て行ってしまっただろう。僕は彼女の目を見ることができなくて床につきそうなくらい長いドレスの裾から覗く黒いパンプスの先をみつめていた。

息を飲みこんで思いきって口を開いた。出てきた声はさつきより小さくて蚊のなくようになっていう表現がぴったりあてはまる声だった。「宮元さんとはどういうご関係なんですか？」

10秒くらいの長い沈黙が続いて僕は声が届かなかったのかと思いつつと顔をあげた。瞬間またあの視線に捕らえられた。それは今までで一番冷たい感じのする視線だった。彼女はもう話すのも嫌だと言っ感じで重そうに口を開いた。

「宮元さんにお聞きになって……私もういきますわ。」

くるつと振りかえって部屋をでていった。カツカツというヒールの音だけが僕の真っ白な頭の中で響いた。もしかしたら僕の質問ってものすごく失礼なことだったのかも……。僕は二人の関係がどんなものなのかとかそんなことよりもその冷たい視線がすごくショックで本当に胸をつかまれる様な苦しい気持ちになった。ぐつと両手を握り締めた。

そしてこんな気持ちの時どうしたらいいのか分からなくて、本当にどうしてだか分からないけど、僕は部屋をでて走って彼女を追いかけた。彼女は毅然とした感じで優雅な絨毯の真ん中をまっすぐに進

んでいた。僕との距離は10mくらいだった。僕と彼女の間には綺麗な着飾ったお嬢さんとか品のいい感じのおばさんとか十数人の人が立ち話をしたりプログラムを見ていたりしたけど、僕にはもう背景にしか見えなかった。

僕がお客さんの間をぬうように走って彼女の右手首をつかむと彼女はものすごくビックリして振り返った。僕はそんなこと全然気に止めないで、走ったのと緊張で少し荒くなってしまっ息を整えながらいった。すみません。失礼なことを聞いてしまって……。彼女はずっとビックリしている感じで何も言わなかった。その眼はさっきみたいに僕を押さえつけるような冷たいものではなくて磨きたてのクリスタルみたいにキラキラしていた。僕はホントにそんなこと聞くつもりじゃなかったんだけどその眼に引き込まれるようにぼーとして口を開いた。

「会場にいたときどうして僕のことあんなにいらんでたんですか？」僕は自分の口からでた言葉にびっくりして彼女の手を離れた。うわっなんてこと聞くんだよ。最悪だ。

彼女は僕がつかんでいた右手首を左手で押さえながら、僕から視線をそらすようにつんと横を向いた。

「いらんだなんて人聞きがわるいわ。あなたの勘違いじゃありませんの？」

キラキラする時計と透明と薄紫色の石が並んだ二連のブレスレットがまぶしいくらいに光を反射させた。

「でもあんなにはつきり……。」

つぶやくような僕の言葉に刺すような声がかぶさった。

「もし本当にそうならば……。」

ぱつと挙げた僕の顔に浴びせるように彼女は冷たく言った。

「あなたのことが目障りだったんではないかしら？」

その眼はきつと空の空間をいらんだままだった。僕はただ呆然としていた。

くるっと向きを変えて歩き出す背中をただみつめるだけだった。

「悠。どうしたんだ。暗いじゃねえか。」

トイレから帰ってきた宮元さんが椅子にすわって僕の顔を覗き込むのがわかった。

僕はうつむいてプログラムの28番目にあつた望月由莉華の文字をじつとみてた。

何も返事がないので宮元さんはちよつと困つたみたいと言つた。

「さっきのことまだ怒つてんのか？」

僕は少しだけ首を横にふる。宮元さんと話したくない訳じゃなかった。ただ奥歯をかみ締めて感情を押さえるのがやつとだった。

宮元さんは本当に困つたみたいで腕を組んでしばらく黙つていた。そして話し出した。

「便所から帰つてくるときにまた客にあつたよ。ほんと金持ちのお嬢さんの相手は疲れる。仕事する前から俺の胃に穴あけるなつてんだよな。」

言葉がむなしく宙に消える。宮元さんが気を使つてくれるのがわかつて僕はすごく申し訳ない気持ちになった。どんどん辛くなる気持ちを押さえるために両手のこぶしをぐつと握り締める。

「悠！」

バンつと宮元さんが右手の手のひらでテーブルを叩く。僕はうつむいたまま堰をきつたように口を開く。

「さっき望月由莉華さんつて人が来て伝言頼まれたよ。今日の発表会の後マリオットホテルで懇親会があるから出席してくださいって。宮元さんに会いたいっていう子がたくさんいるって。あと・・・懇親会の後話があるからバーに来てくれて。」

宮元さんは、ああつ。てちよつと頼りない返事をした。

「あと・・・。」

僕は少しだけ顔をあげて宮元さんをみる。宮元さんは感情のよめない表情で僕をじつとみていた。僕は宮元さんと視線をあわせたまま言つた。

「僕のことを目障りだって。」

宮元さんは僕をじっと見たまま何も言わなかった。僕は自分の目頭があつくなるのが分かった。

「僕もトイレいつてくるね。」

必死に笑顔を作って部屋をでた。宮元さんはずっと何も言わなかった。こんなことで泣きそうな自分が情けなかった。

トイレで顔を洗って深呼吸して休憩部屋にもどると宮元さんが言った。

「悠、お前今日は帰れ。」

もみじと満月、そして秘密

宮元さんから電話があったのはそれから二日後の夜だった。着信表示に僕が少し躊躇しながら携帯の受信ボタンを押すといつもとなにも変わらない適当な感じの宮元さんの声が聞こえた。

「うっす。お前明日暇か？ちょっと紅葉でも撮りにいかないか？」

「うん。学校が終わってからならいいよ。どこまで行くの？」

僕もいつもと変わらない感じで返事をした。それから目的地と時間を決めるとじゃあ明日。と言って電話を切った。いつもと何も変わらなかった。少しほっとした。あれからずっとあの日のことで落ち込んでばかりいた。あの望月さんって言う人に一方的に目障りって言われたこともその理由の一つではあるけれど、それよりも自分の感情を押さえられずに宮元さんにあたってしまったこと、仕事を途中で投げ出して迷惑をかけてしまったことで自己嫌悪ばかりしていた。明日宮元さんにちゃんと謝ろう。そう決めると僕は学校から帰ったらすぐ出られるようにカメラ用のバックに荷物を詰め込んだ。

学校から帰って着替えるために急いで二階の自分の部屋に向かおうとすると居間のほうからケラケラ笑う母の声が聞こえてきた。

「それでねその店員がほんとにしつこくて私ほんとに頭にきて言っちゃったの。なんていったか分かる？」

はははつと男の笑い声が聞こえて僕はのぼりかけた階段を駆け下りて居間に向かう。

「才能ないんじゃない。」

「いやだー。さすがシヨウちゃん！」

居間の扉を開くと笑い転げてた母と宮元さんが一斉に僕の方を見た。「おかえり。悠もシュークリーム食べる？ケーニヒスクローネの新作よ。久しぶりにシヨウちゃんが来るって言うから三越まで買いにいつちやった。」

クスクスと笑いの余韻を残しながら母はソファを立ってキッチンに向かった。

僕は宮元さんの隣に座った。宮元さんはまだくっくつと笑い続けた。

「お前の母ちゃんはいつまでたつてもきつついなあ。」

僕はそんなに明るい気分にもなれず、またシュークリームだねとも言えずただ黙っていた。宮元さんも黙って紅茶を飲んだ。

「今日は事務所じゃなかったの？」

自分の声が少し緊張しているのが分かった。

「んっ。仕事で近くに寄る予定があつたからついでに華絵さんに会いにこようとおもつてさ。」

宮元さんの声も少し硬い感じがした。

ふーん。という会話が止まってしまった。僕は謝るタイミングをはかっていたけどなんとなく切り出すことができずにいた。気まずい雰囲気を破るように母が紅茶とシュークリームを持って現れ

「なになに。どーしたの？ケンカでもしたのー？」

とまたクスクスと笑う。

「そんなんじゃないよ。」

僕が怒つたようにぼそつとつぶやくと

「あらやだー。生意気になっちゃって。」

とまたケラケラ笑った。母にとつては何でもおかしいことみたいだった。そういえば昔ね。と言って宮元さんと仕事でケンカをしたことを話だす。宮元さんも笑いながら話を聞く。僕は黙ってシュークリームを食べて紅茶を飲んだ。そして

「じゃあ。着替えてくる。」

と言って居間をでた。部屋を出るときに宮元さんが。家の前に車つけとくからなー。と言って僕がわかった。と言った。

宮元さんは黒のサーフに乗っている。後部座席は全部倒して三脚とかカメラを積み込んでいる。僕は自分のカバンを後ろに乗せると助手席のドアを開けて宮元さんの隣に座った。宮元さんは窓を開ける

と母にひらひらと手を振った。

「じゃまたね。卓哉さんによるしく。」

「おっけー。今度は鍋でもさそうわ。」

母が手を振るとアクセルを踏んで車を出した。日が沈みはじめて空は茜色になっていた。僕は宮元さんが窓を閉めるとすぐずっと頭の中で繰り返していた言葉を言った。

「このあいだはごめんなさい。」

宮元さんは何も言わずにまっすぐ前を向いていた。

「あんなふうに住事の途中で迷惑かけることもうしません。」

宮元さんは前を向いたままで

よろしい。

と軽くいった。そしておまえビートルズ好きか？と聴くとビートルズのCDをかけて自分も歌った。

信号で止まると

「くそつ。お前も歌え。俺だけかみたいじゃんか。」

と言って僕の頭をぐちゃぐちゃにかき回す。

「やめてよー。知ってる曲少ししかないよ。」

僕が抵抗すると、しょうがねえなあ。って言って僕が知ってるLet it beをオールリピートにして目的地につくまで二人で10回も歌った。宮元さんは7回目くらいからのりのりに体を揺らしながら歌ってて、僕は事故るんじゃないかって心配してすっかり前をみえた。

大きな池のある公園についたとき日はすっかり沈んで月がでていた。今日は満月だった。

宮元さんは三脚をセットして池と紅葉と月のバランスを変えたりしながら何枚も写真を撮った。僕も紅葉をとったり紅葉をみに来てる人を撮ったりした。満月の強い光に照らされた紅葉はすごくきれいだった。月の光はライトアップの光より少し柔らかくて紅葉の上に降ってくるみたいにしてその赤さに強弱をつけていた。

「満月の夜は紅葉がいつそう赤くみえねえか。」

宮元さんは三脚を片付けてバックにしまい、カメラを肩にかけて空を見ていた。

「うん。綺麗な色だね。」

僕も空を見た。宮元さんは紅葉を撮るために今日を待っていたんだ。きっと毎年満月の夜を選んで紅葉を撮りにきているんだ。僕はそう思った。

「満月ってのはなんか誘われるんだよ。紅葉だって海だって満月の夜が一番綺麗だ。」

宮元さんは空を見ながらふっと酔ったように笑い独り言みたいに言った。

「色気がある。」

僕はクスクスと笑った。宮元さんらしいや。僕の方をみると宮元さんも同じように笑った。

「犬も猫も女も男も。」

カメラを構えると僕に向けた。僕はあんまり撮られるのが好きじゃなかったからふっと横を向いた。カシャっというシャッターの音がする。

「おまえも俺も。」

もう。って言いながら振り向くと宮元さんはカメラを下ろしてにやっと笑った。月の光の中でそうして立っている宮元さんには少し憂いがあるって確かにいつもより“色気がある”気がした。

「ねえ宮元さん。望月さんとはどういう関係なの？」

僕はすごく素直な気持ちになって聞いた。あの日からのもやもやとした気持ちはすっかりなくなっていた。

宮元さんは一瞬真顔になるとまたふっと色気のある顔をする。

「お前あの子に惚れたのか？」

僕は月をみて考えた。

「そんなんじゃないけど・・・。」

何なんだろう。自分でも良く分からない。失礼なことをいちゃって

悪かったな、とかなんであんなことを言われたんだろう、とかじゃなくてただ単純にあの人の目が忘れられなかった。

「興味はあるな。」

思ったままに言うつと宮元さんはふふつと笑った。

「色っぽいこというじゃねえか。」

そして僕の隣に来ると腕をくんでさっきの僕と同じように月をみて少し考えてから言った。

「おれ昔華絵さんのことを最高の女っていったろ。」

月の光は宮元さんの顔にゆらゆらと強弱をつける。

「望月由莉華は俺にとって最悪の女だ。」

宮元さんはそういつて僕の顔を見る。

「わかる?」

「わかんない。」

僕は首を横に振りながら言った。

「色々難しいんだよ。あとで事務所によるう。」

よし、かえるぞ。つて言つて一人で駐車場に向かつていく。僕はその後を慌てて追いかける。宮元さんの身長は188cm、僕の身長は165cm、コンパスの差は歴然だった。

駐車場までなんとか追いついて車に乗り込むと、ぐーと宮元さんのおなかの音がする。

「事務所の前におでんやでもよらない?」

僕は笑つていいよ。て答えた。もう色気もなにもありゃしない。

おでんやでは望月さんの話はしなかった。いつもみたいに母の話や宮元さんがシベリアでオーロラを撮ったときの話をしながら僕も宮元さんもすぐたくさんおでんを食べた。宮元さんは途中で3回、ビール飲んでいい?つて聞いて僕は3回絶対だめ。つて答えた。あと宮元さんは

「紅葉つていうのはな、寒くなるとあかくなるんだぞー。お前もはやく苦労して赤くなれよ。」

っていった。

二人ともおなかいっぱいになって店をでて

「ごちそうさまです。」

僕がおごってもらったお礼をすると宮元さんは

「いいよ。今日は給料なしだからな。」

と言つて笑つた。

「今日は仕事じゃないんでしょ？」

「うんまあな。」

僕は今日宮元さんが誘つてくれたことをすごくうれしく思った。

事務所につくと宮元さんはちよつとまってる。と言つて奥のほうにある物置に入つていった。僕はいつものようにキッチンでコーヒーを入れながら、宮元さんはビールの方がいいかなあ。と思つた。事務所ついてもここには宮元さんが寝泊りしてる部屋もあつて普通に通じたら宮元さんの家なんだけど2LDKのうち6畳の寝室とキッチン、お風呂、トイレ以外すべて仕事用に使われているから僕はここを事務所つて呼んでいる。10畳くらいあるLDには打ち合わせ用のテーブルとソファ、テレビ、オーディオ類、写真関係の書籍やカタログの入った本棚、仕事用のデスク、パソコンとかが置いてあつてお客さんが来るところだからいつも結構きれいにしている。宮元さんが入つていった8畳の物置には昔の仕事の資料やカメラの機材とかがしまわれている学校にあるみたいなスチール棚が6つあつてすべてにカギが掛けられている。あと入つてすぐ右の二畳くらいのスペースを改造して現像室にしている。そこも比較的整頓されている。宮元さんの部屋にはセミダブルのベッドとタンス、あとCDと本くらいしかないのになぜかいつも散らかっている。洗濯物は大体クリーニングで、クリーニングから帰ってくるとそれらは部屋に投げ捨てられる。宮元さんは寝室は寝ればいいんだ。と言つてめつたに掃除しない。

「これだよ。」

宮元さんはファイルを二冊もって物置から出てきた。僕はテーブルにコーヒーを並べてソファアに座っていた。宮元さん、ビールのがいい？と聞くと後でいい。と言ってファイルをテーブルの真ん中に置いた。そして僕を見て

「いいか。これは仕事の話だから秘密厳守だぞ。」

と真剣な顔をして言った。僕はこのファイルの中に何かすごい秘密があるのかと思いきや、ときどきした。

「じゃあ、いきまーす。」

宮元さんがめくった一冊目の1ページ目には小学生くらいの女の子がピンク色のドレスを着て立っていた。言って2ページ、3ページとめくっていく。どの写真も同じ女の子でページをめくる度にだんだん成長していった。服装はドレスだったり着物だったりした。そしてどの写真でも女の子はきつと前をにらんでいた。その瞳は深い緑色で僕が忘れられずにいた望月由莉華の瞳だった。

「正解はこういうことでした。」

ほとんど3日前の彼女と変わらない感じの最後の12ページ目を閉じると宮元さんはおどけていった。そして閉じられたファイルを食い入るようにつめる僕に言い訳するみたいに言った。

「俺は結構頑張ったんだけどな。最新のギャグを覚えたり、半分色仕掛けめいたこともしたこともあった。大サービスしたんだよ。」

僕が何もいえずに視線を上げると宮元さんはあー。って小さく叫ぶみたいにしてソファに仰向けになって長い足を組んだ。

「だけど結局12年間笑った顔は撮れなかった。」

言い方はふざけた感じだったけど顔は真剣で少し悲しそうだった。

「もう一冊のほう、見てもいい？」

僕が聞くと宮元さんは目を閉じて言った。

「ごっぞ。」

僕は二冊目のアルバムを取るとそうつと表紙をひらいた。

「うそっ！」

びっくりしてファイルを落としそうになった。

なぜかっていうとそこにファイルされていた写真には組んだ指のうえにあごをのせ少し顔を傾けて目を細め誘惑するみたいに微笑む彼女が写っていたから。

続けてページをめくると今度は毛の長いペルシャ猫を抱いて白い歯をみせて優しそうに笑っていた。そして最後の写真では豪華な内掛け姿で目は伏目がちだったけど口もととは静かに微笑んでいた。そこにファイルされていたのは3枚の写真だけだった。

「笑ってるよ！」

僕は宮元さんに向かって写真が見えるようにファイルを開いた。それは宮元さんのファイルで彼がそれを知らないわけがないのに。宮元さんは目を閉じたままで言った。

「よく見る。それはあの子じゃないし俺が撮った写真でもねえ。」
もう一度よくみるとその写真達はすべてセピア色だったし画像も今のものより荒かった。そして右下に印字されている日付はすべて23年以上前のものだった。

「それはあの子の母親だ。」

僕はもう一回写真を見直す。言われると鼻の高さとか目の形が少しだけ彼女と違う気がした。宮元さんは、よっ。と起き上がるとコーヒーを飲んだ。

「2、3年もすれば誰だって変におもっさ。カメラに対してこれだけ笑わない子供は普通じゃない。ましてや金持ちのご令嬢でこれだけの美人だぜ。自分が世界の中心っておもってても不思議じゃない。」

視線を感じて僕がそおつと写真から顔をあげると宮元さんは開いた足の上に手を組んでおき真剣な顔で僕をじっと見ていた。

「俺も調べちゃったわけよ。」

そして望月由莉華の生い立ちについて語り始めた。

望月由莉華の父親、望月真樹はセントラルトレードっていう商社の会長をしている。僕はあんまりそういうことに詳しくないけど、宮

元さんの話によるとそれは日本で一番古い貿易会社でそこからセントラルトラベルとかセントラル鉄鋼とか8つの会社ができ、つまり望月真樹はそれらすべてを束ねるグループの代表を兼任している。僕も一応母親はもと売れっ子アイドルだし、父親は小さいけど安定してる会社の社長だからそこそこ裕福な家庭に育ったわけだけど、それでも月とすっぱんらしい。

話はその望月真樹がまだ会長にも社長にもなっていない頃から始まる。まだ部長で32歳のとき彼は修行のために海外を飛び回っていた。望月家では専務になる前に関係しているすべての国との貿易をチームリーダーとしてまとめることが必要条件で、また社長になる前には最低2個の海外にある子会社の社長として3年間ずつ会社をまとめることが必要条件だった。彼がフランスと日本を往復していたとき、専務になるための必要条件をクリアする直前だった。そしてその最後の国で彼は望月由莉華の母親と出会った。彼女はフランスで芙蓉という芸名でモデルをしていた。国籍はフランスだったけど生粋のフランス人じゃないのは一目両全だった。どんな血が混じっているのか分からなかった。芙蓉の母親、つまり望月由莉華の祖母は娼婦だった。芙蓉の目は綺麗なブルーで肌は白かった。だけど髪はほとんど黒の濃いブラウンだった。その容姿の珍しさと美しさはすぐプロの目に止まり彼女は16の時モデルとしてデビューした。芙蓉の母は彼女を日本人とのハーフだと言った。なぜなら知っている黒髪の外人の中で日本人が一番お金持ちで、優しく、質のいい客だったから。そして日本の花の名前を芸名としてつけた。今ではその名前しか残っていないくて16までの間彼女が母からなんとよばれていたのかは分からない。芙蓉はフランスが嫌いだった。彼女はその髪の色と娼婦の娘であることによってずっとフランス人じゃないといじめられ続けてきた。芙蓉はその意外性がうけてモデルとして成功し普通に生活できるようになると日本語を勉強し始めた。いつか日本にいき本当の日本人になりたいと願った。そして20のときなにかのパーティーで望月真樹とであった。芙蓉はそのパーティー

ーに日本人がいると聞くとすぐに望月を探して日本語で声をかけた。望月は英語はできたけどフランス語は少し苦手で久しぶりに聞く母国語にすごく安心感をもった。二人はすぐ恋人になり深く愛し合った。望月は芙蓉の美しい容姿と日本語や日本のことを一生懸命知ろうとする一途さに強くひかれた。芙蓉は望月の背後にある日本を愛した。そして望月がフランスで仕事をした8ヶ月間ずっと夫婦のように暮らし、期間の終わりに一緒に日本に帰った。そのとき芙蓉は妊娠4ヶ月の身重の体だった。

芙蓉を連れ帰った望月にそのときの社長だった望月の父は激怒した。望月には婚約者がいた。望月が32になっても結婚していなかったのはその婚約者が当時15歳だったからである。婚約者が16歳になる次の年、二人は結婚、望月は専務に昇格、そしてセントラルグループは経営をさらに拡大する予定だった。セントラルグループにとって望月の結婚は絶対だった。芙蓉は結婚はなくてもいい、子供の認知もいらない、ただ日本にいさせてください。と頼み続けた。望月の家の中で芙蓉は使用人として扱われ、その娘由莉華は使用人の娘として育てられた。由莉華に真実を伝えることは許されなかった。次の年、父の計画通りに望月は結婚し、専務になりアメリカにある子会社の社長として出向した。望月は芙蓉を連れて行くとうとしたが、父はそれを絶対に許さず、芙蓉自体も日本に残ることを強く希望した。芙蓉の愛が自分ではなく日本にあることに気がついて失望した望月は16歳になったばかりの妻を連れてアメリカに渡った。その3年間は芙蓉にとっても由莉華にとっても幸せな日々だった。使用人といっても望月家は大きな家だったので普通に生活できる給料はもらえたとし、未婚の母でも子供はすくすくと育った。でもそれは3年間だけだった。3年後アメリカから帰ってきた望月の妻、彩香は次の3年間は日本に残るといいはり、望月が一人イギリスにいた間、芙蓉を執拗にいびり続けた。アメリカでの3年間、望月は彩香のことを一度も愛さなかった。彩香は望月を問いただすすべてを聞いた。その事実はいままで愛され続けて育った彩香に対しての

侮辱行為だった。彩香はまだ4歳の由莉華をも標的にし、服を脱がせ真つ暗なへやに24時間閉じ込めた。芙蓉にはそれ以上の行為をした。でも体に傷をつけることはしなかった。望月にばれてはいけなかった。望月の正妻であること、それがそのときの彩香のただひとつの砦だった。そして望月が帰った3年後、芙蓉は病に伏し、由莉華は笑うことのない暗闇を以上に恐がる子供になっていた。そのまま芙蓉は亡くなり、由莉華はたった一人望月家に残された。一年後、社長になった望月は父に由莉華を実の娘として認知し望月家の後継者とするのを申し出た。7年の結婚生活で孫をもてなかった父は自分の年も考えそれを承諾しようとした。しかし彩香がものすごい反抗をした。望月が40であろうと、その父が70であろうと彩香はまだ24だった。私が望月家の後継者を生むんだ、そう決心するとあらゆる手を使い一年後望月との間に子供を作った。父はよろこんで由莉華の認知はしない、後継者は彩香の子だと断言した。彩香の子供が生まれて一年後望月の父は満足そうにいきを引き取った。望月は父の存在がなくなると彩香やその他の人間の反対を押し切り由莉華を実子として認知した。しかしそれは由莉華にとって母と自分の苦しみの理由を知るための辛いだけの真実だった。由莉華は誰にも心を開かないまま冷たい目の女性になった。

「俺は望月さんがあの子を実子と認知して公に公表してから毎年あの子の写真を撮ってるんだ。望月さんにとってあの子はたった一人本気で愛した女との大切な愛娘なんだよ。母にも娘にも結局片思いだったとしても。泣かせるだろ。」

すべて話し終わってずっと下を向いていた宮元さんは僕の顔を見た。僕は呆然とした。そんなめちゃくちゃな現実ってあるんだろうか？

静かな、冷たい、悲しい、緑の瞳。

冷たい言葉。

胸が苦しかった。

「家まで送ろうか？」

すごく優しい声だった。

僕は首を横にふるとできるだけ笑顔を作った。ものすごく引きつっているのが自分でも分かった。

「電車で帰る。・・・早くビール飲みなよ。」

僕は部屋を出て宮元さんはマンションの出入口まで見送りにきてくれた。僕は出入口のところまで背の高い宮元さんの顔を見上げるようにして聞いた。

「なんで彼女は最悪の女なの？」

宮元さんは僕の肩にぽんつと手を置いた。

「俺は人でも動物でも一番パワーある瞬間を撮りたいんだよ。泣いてもいい、笑ってもいい、その感情がカメラまで伝わってきたとき、シャッターを切る。・・・あの子は写真を撮るとき全身全霊で憎しみを現すんだ。だけど俺にはそれがひどく悲しげでに見えて、助けてって、言ってるみたいに見えて・・・俺は・・・それが受け止められなくて。」

宮元さんの手は痛いくらいに僕の肩をぎゅっと強くつかんだ。少し震えていたかもしれない。

「シャッターを切る前にいつも目をつぶっちゃう。・・・俺にはとれねえ、最悪の被写体だよ。」

もみじと満月、そして秘密（後書き）

今、本業が忙しくてこれ以上続きを書く時間がありません。もし、万が一、続きを早く読みたいと思われる方がいらっしゃいましたら本当に、本当に申し訳ありません。

君のためにできること1（前書き）

2ヶ月ぶりくらいに書きました。3章すべて書くには時間がたりないので分けながら投稿することにしました。

君のためにできること1

「わりい。ちと熱くなっちまった。」

宮元さんはちよつと照れて両手で自分の顔を覆った。そしてそのまま大きく一息ついて言った。

「おまえ、来週の日曜仕事できる？あの子のところにいくんだけどさ。」

シゴト、アノコ・・・。

最初、頭が混乱して宮元さんが何を言っているのか理解できなかった。

シゴト・写真、アノコ・望月由莉華。日曜日に望月さんの写真を撮りにいく。

内容を理解しても何て答えるべきなのか考えられなかった。

彼女の綺麗な緑色の瞳、冷たい声が脳裏に蘇る。

・・・アナタノコトガ、メザワリダツタンジャンイカシラ・・・

「やめとくか・・・？」

何も言えず俯く僕をみて宮元さんは優しく笑った。

「あの子が冷たいのはお前に対してだけじゃねえよ。別に本気で嫌われてるわけじゃないから心配すんな。」

そうかもしれない。あの言葉は僕がしつこかったからはずみででてしまった言葉だったのかもしれない。

それでも・・・もう一度彼女に会うつてということが想像できなかった。それは僕の肩に大きな重圧を与えた。

宮元さんはいつものように僕の頭をぐちゃぐちゃにかき回し、そしてあきらめたように言った。

「わるいな。あんな話聞かせたあとで仕事頼むなんてさ。」ごめん。

日曜は俺だけでいくよ。」

その手は優しくして、僕は自分を情けなく思った。

「でもちよつとだけ聞いてくれよ。」

顔をあげると、宮元さんはいつもより少し真剣な表情でマンションの外の暗い道をみつめていた。それは細い通りで人通りはなく小さな街灯の明かりだけが暗いアスファルトを照らしていた。

「俺には無理なんだよ。きつとこれからもちゃんとおのこを撮ってやることはできない。あのコの感情を受け入れてやるほどの器は俺にはない。もうわかってるんだ。」

「いつも自信たっぷりな宮元さんからは信じられない言葉だった。」

「悠。」

僕は自分の名前を呼ばれてどきつとした。

宮元さんの声は静かな夜の空間に低く響く。

「俺はおまえならできるかな。って思うんだ。」

思ってもなかったことを言われて僕は場違いに間抜けな声をあげた。

「えっ！なんで?!」

僕のあまりの驚きに宮元さんも少し驚いて、そしてくすくすと笑った。

「なんでだろうなあ？わかんねえ。ただの感だよ。」

「そんな無責任な・・・。」

宮元さんの適当な言葉で僕は今までの緊張がとけて気が抜けてしまった。

宮元さんはそんな僕をみて小さく笑い続ける。

「俺はおまえの写真、結構好きだよ。まあ技術はまだただけだななんていうかなあ。俺は難しいこといえないけどおまえはいいレンズ持つてるよ。カメラじゃなくてこつちな。」

言いながら人差し指で自分の右目を指した。

「おまえはまつすぐに物を見れてると思うよ。多分屈折したところがないんだろうな。」

宮元さんがそんな風に僕をほめることなんてなかったからすぐくつれしく思いながら、少し気恥ずかった。

「なんか宮元さんらしくないや。」

宮元さんも少し照れていたのか、まあまあと言いながら僕の肩をポ

ンポンつと叩いた。

「俺がおまえをあのコのところに連れてこうとしたのは、おまえのためじゃない。あのコのためだ。おまえならあのコの何かを変えられるんじゃないかと思っただよ。目をそらさずにな。・・・あとは俺のためだな。はっきり言ってあのコのこと撮るのが俺は辛いんだよ。」

そして僕をみてまったくすつと笑った。

「ごめん。全部俺の勝手だよ。おまえには関係ない。」

「じゃあな。遅くまでわるかったな。華絵さん心配するから早く帰れよ。」

そう言つと宮元さんはマンションのエレベーターで部屋に戻っていた。僕はそれを複雑な気持ちでただ見ていることしかできなかった。

帰り道の間も家に帰ってからも、望月さんのこと、いつになく自信なさそうな宮元さんの様子、そして宮元さんの言葉のことをずっと考えた。

日曜の仕事に行くことを決心して宮元さんに電話したときには深夜2時を過ぎていた。

宮元さんは、わかった、ありがとう。とだけ言った。

君のためにできること①（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507a/>

氷の花

2010年10月14日21時59分発行